

機能医療 (Functional Medicine)

針谷 佳代子 (歯科)

Medical Coachingとは

『セルフコーチングを含めた医療従事者のための 対クライアントとその周囲・環境に対するコーチングとし、医療従事者自身がコーチングを科学的に分析研究・理論化して、積極的に医療の分野に取り入れることにより、更なるクライアントの利益を生むこと』

Medical coaching

東洋、西洋の従来の医療手法に加え これを併用し
「医療従事者がクライアントを治療する」「治す」
から「クライアントの自発的治癒・病の放棄」そし
て更に先の「クライアントの自身による目標達成
へ」までを完結とする

という現医療、医療体制のパラダイムシフトを目指
します

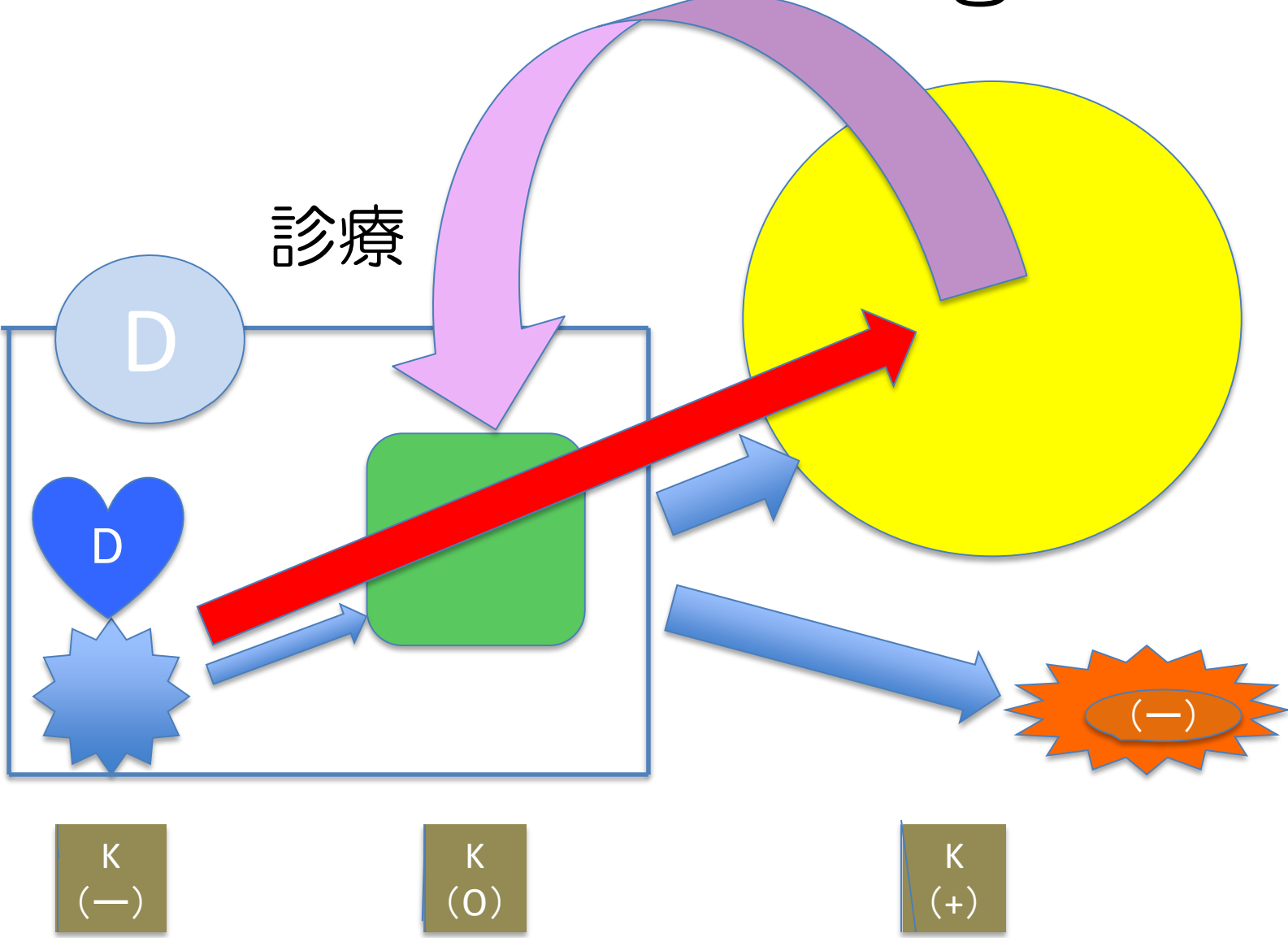
つまり ” 治る(0ポイントまでの回復)” だけで
なく ” その先の幸福まで” ということで むし
ろ後者に重点をおきます

それが医療従事者自身の自己評価、エフィカシーに
つながります

Coaching

コーチ (coach) = 馬車

Medical Coaching



医療者は何を学んできたのか

- 「本来的な人の姿」よりも 「病の姿」の研究が主体
- 「マイナス」から「0」で終わり：治癒？
- 目的の捉え方が異なるのでは？

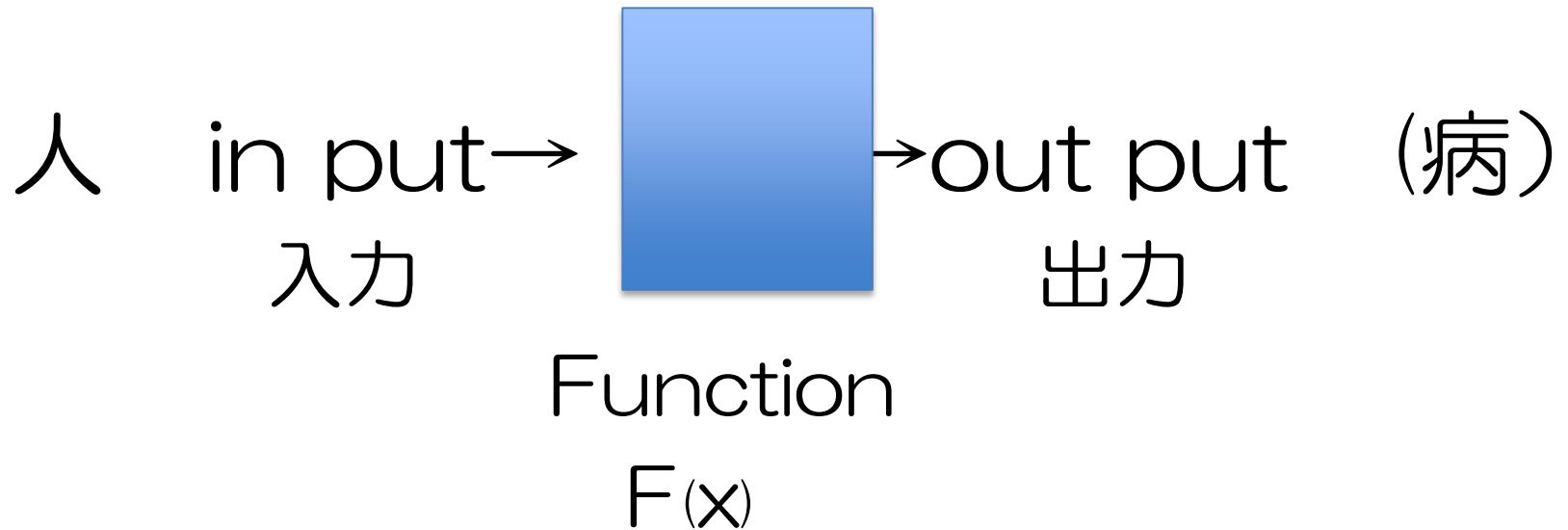
経済至上主義・健康保険制度

- どう「治して」（「0」）いいのか：予防？！
- 「病」を発生させて加療？
- 「マイナス」から「0」よりむしろ「プラス」なのでは？
- 日本古武術：射抜く（標的のさらに先を狙う）、捌（さば）
く

機能とは

機能 = Function = 関数 $F(x)$

関数 $F(x)$ とは



関数を変える

- 本来的もしくは現状よりも良い機能に変える

実情の提示（心）

緩める（身体）



抽象度が上がる

機能医療

人が社会的・身体的に「機能」の更新を行う環境づくりを 医療従事者がサポートする医療

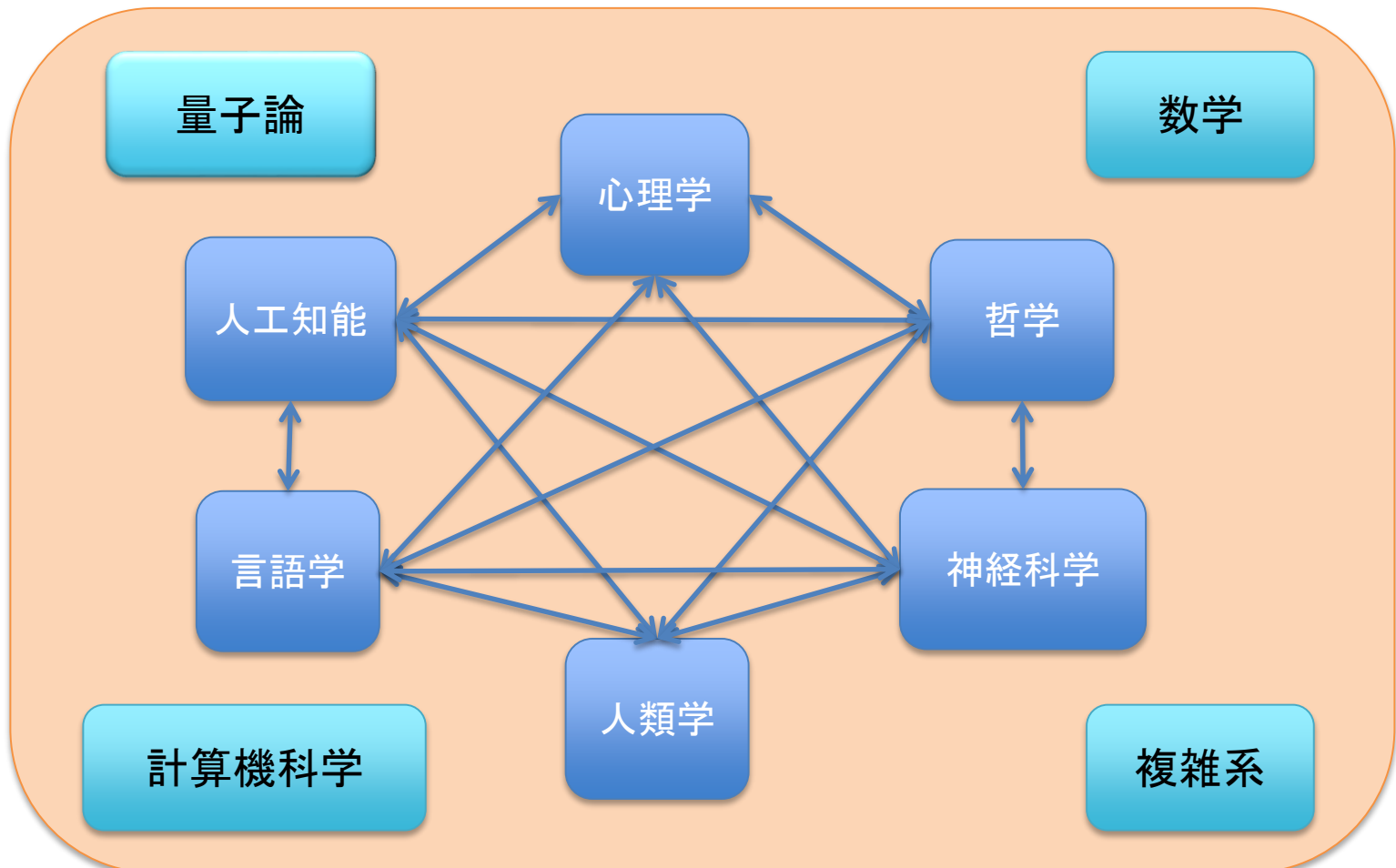
機能医療の定義

認知科学・機能脳科学・超情報場仮説を基盤とする

1. 「病」を「健康状態」と相反する概念としてではなく、人の状態の一部（ホメオスタシスの一形態）として捉える医療パラダイム。人の状態を変容させることを主たる目的とする。
2. 1を実施する理論、方法論として人を情報的な存在として捉える。
3. 情報を扱う手段として、人や人を取り巻く環境であるホメオスタシスを「関数」とし、操作を行う。
4. 情報の階層（抽象度）を導入。
5. 患者（クライアント）の認識範囲、環境との関係性によって時制、状況により変化する。
6. 人の変容の方向性は、患者（クライアント）の環境の目標が決定する

認知科学の概略

情報処理の観点から知的システムと知能の性質を理解しようとする研究分野



認知科学より以前

- ルネ・デカルト：二元論
心と身体（脳と物理身体）
- イマヌエル・カント：アプリアリ
経験的認識に先立つ先天的、自明的な認識や概念
- ジークムント・フロイト：精神分析

認知科学・機能脳科学 (R)

情報の概念と情報科学の方法論と脳

- ヴァーチャルリアリティーVRの追求
ex.映画「トータルリコール」
入力する**五感情報の精緻さ**



- 「電車の中で小説を読み涙を流す問題」
その人の認知が世界を見ている
(重要度あるいは情報量の大小)
他人とは違う
現在の自分は過去の全て
情動が関与している
人は自分の記憶にあることしか認知できない

環境

- 気候・風土
- 文化・社会
- 家族
- 身体
- 身体各部位・各器官…
- ホメオスタシス（生体の現状維持）
- 思考（心）

認知

- 人によって異なる
- 病気・不具合も認知は同じではない
- 直接対決（同じ抽象度）ではクライアントの強いRに負けることも

例えば 夜道でストーカー?!

怖い⇒身体を固める（緊張）

抽象度を上げて観る⇒振り向いたら知人、周囲に警官がいる

- 交感神経が優位（大脳辺縁系主体：情動）
- 前頭前野を優位にし抽象度を上げる（思考）
- 無意識への直接介入は困難
- 意識で拾い上げ、操作、無意識に再び投げ込む

問題点

<医療者側>

- 資格取得に関わる対価
- 各論が主、全体(人)を習わない(教育)
- 思想・視点(知識の不足)
- 医療と健康保険制度の関係(特に診断)
- マニュアル化(システム化)
- EBM・方法論が優位
- 「医学」は「学問」なのか？

問題点

<クライアント側>

- 自己責任
- 思想・視点
- 無意識の回避（ホメオスタシス）
- 健康保険制度

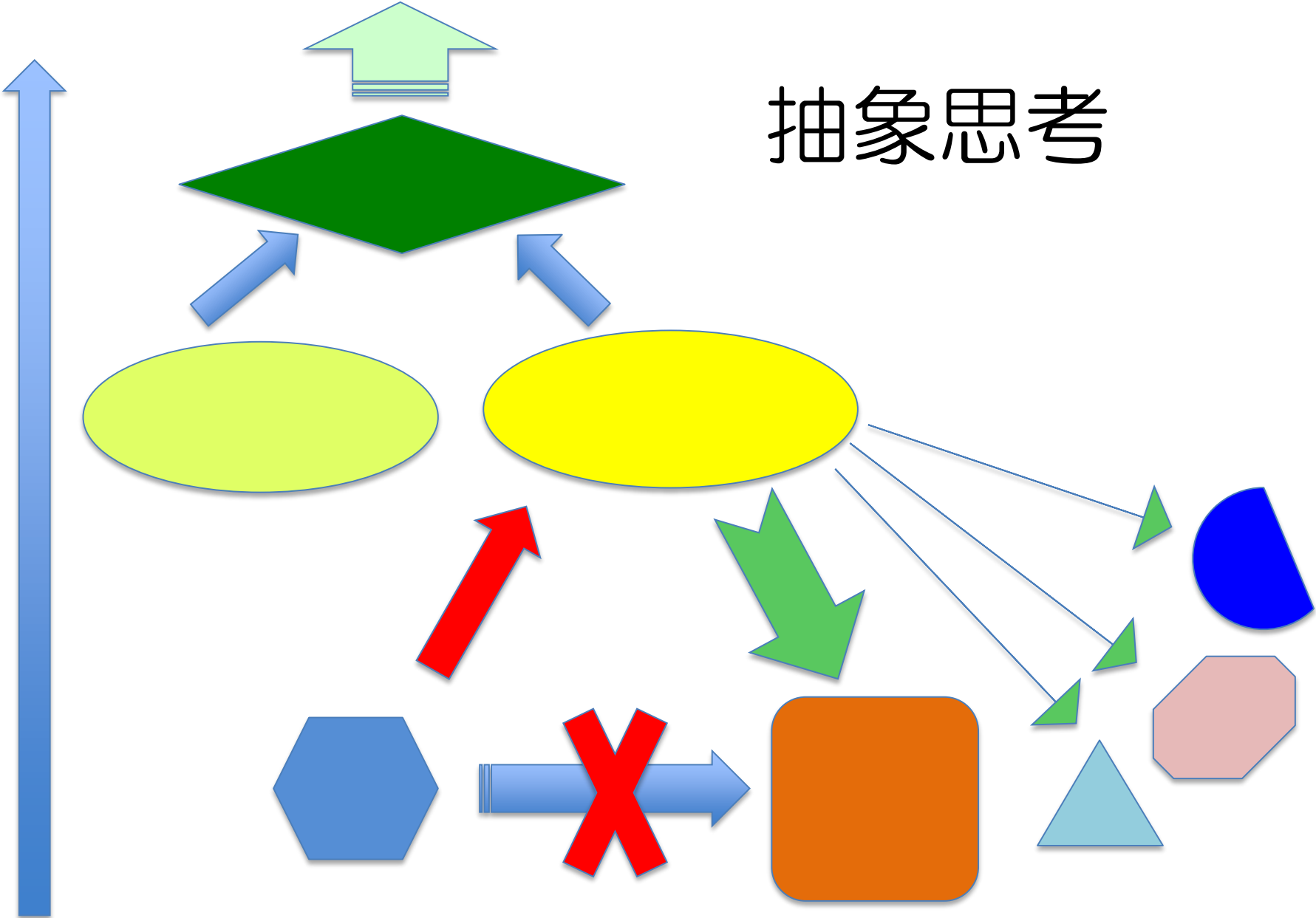
なぜ治らない？

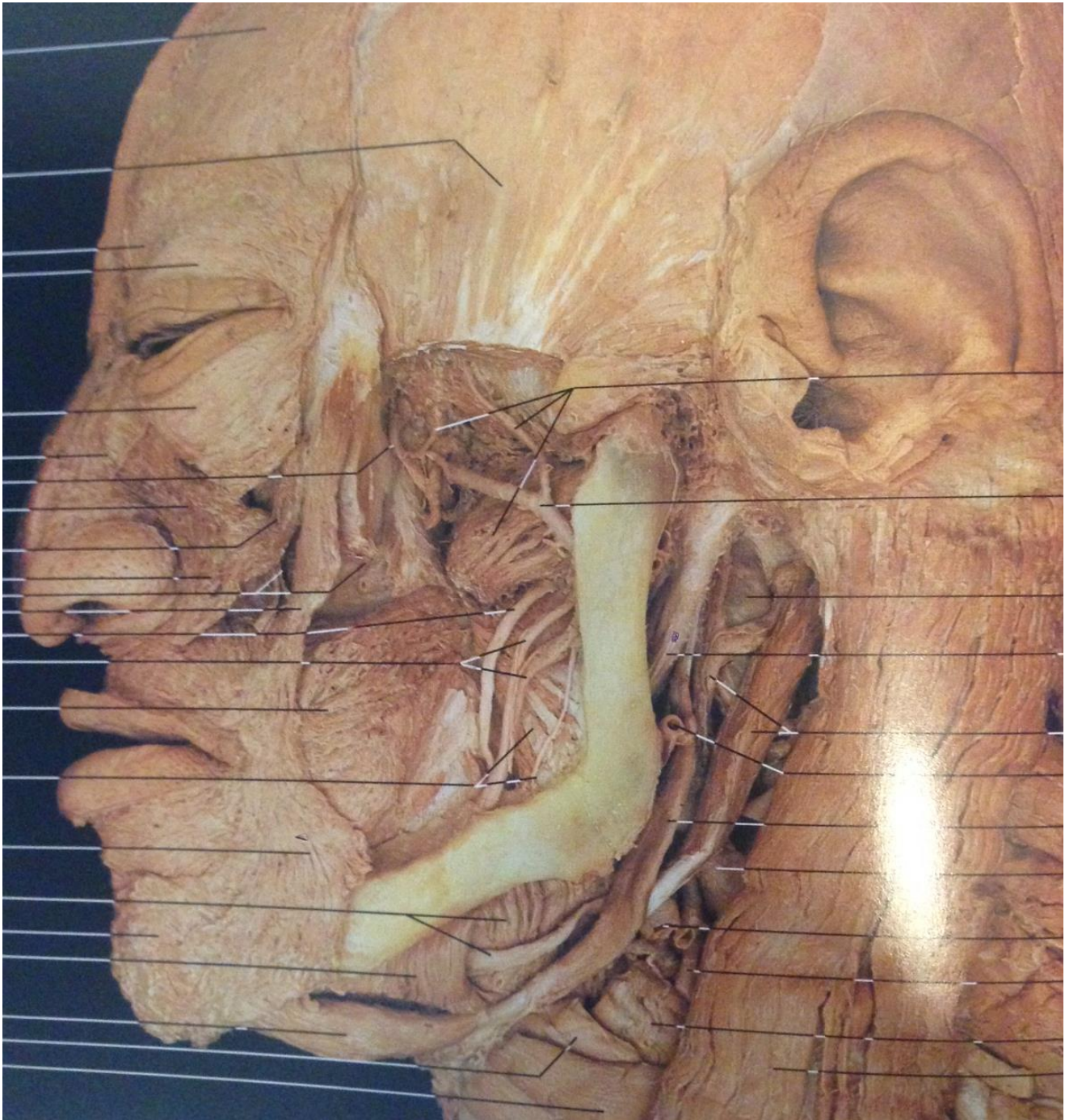
- 1 対症療法と原因除去療法
- 2 医療従事者がクライアント(病の状態)と同じ抽象度にいる(視点)
- 3 人は自分の記憶にあることしか認知できない
(情報的ホメオスタシス)

なぜ身体を緩めるのか？

- 身体が固まり本来の動きができていない
- 筋肉疲労
- 関節の適当な動作ができない
- 姿勢の変位、偏位
- 血管、リンパ、細胞レベルetc…
- 軸
- IQを上げる（抽象度）

抽象思考





歯科医師としての視点

- 不思議なことがいっぱい なぜ？ 噛み合わせの無い歯の調整
- 観る・知る・感じる
- 個人差
- 診療基準の曖昧さ

- 「食いしばり」とは
脳の記憶処理経路に関連か？ (小脳)
強い力（無意識下）で歯及び周囲組織を破壊させるに足る力→コントロール
ストレスマネジメントである（Prof.ルドルフ・スラビチェック）
生命維持に必要な行為

- 身体を固めることに情動が関与 (恐怖、不安、悲しみ)
身体を緩めることで 情報の処理が変わるのでは？
個人差のある生体への共通のアプローチとして有効？
クライアントにとっての診療終了やゴールとは？

- 環境を整えるとクライアントは勝手に治り始める

関数を変える

- 本来的もしくは現状よりも良い機能に変える
実情を提示（情報→心）
身体を緩める
差分の提示

「奥歯に挟まるのが気にならなくなった」



思考(心)の変化は身体(物理)に現れる
(情動記憶)

園芸療法（西野憲史先生）

*まず思考と身体を使う（なぜ？どう？）

*切迫していない状況

リラックス

*先を観る（将来の庭の様子をイメージ）

抽象思考

*結果の確認（よろこび・感動）

*Want to（～したい！）の発現

*積極性や主体的思考へ

「痛み」

心身にとっての「アラーム」
?!

1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。

1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。

1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。

1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。

1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。

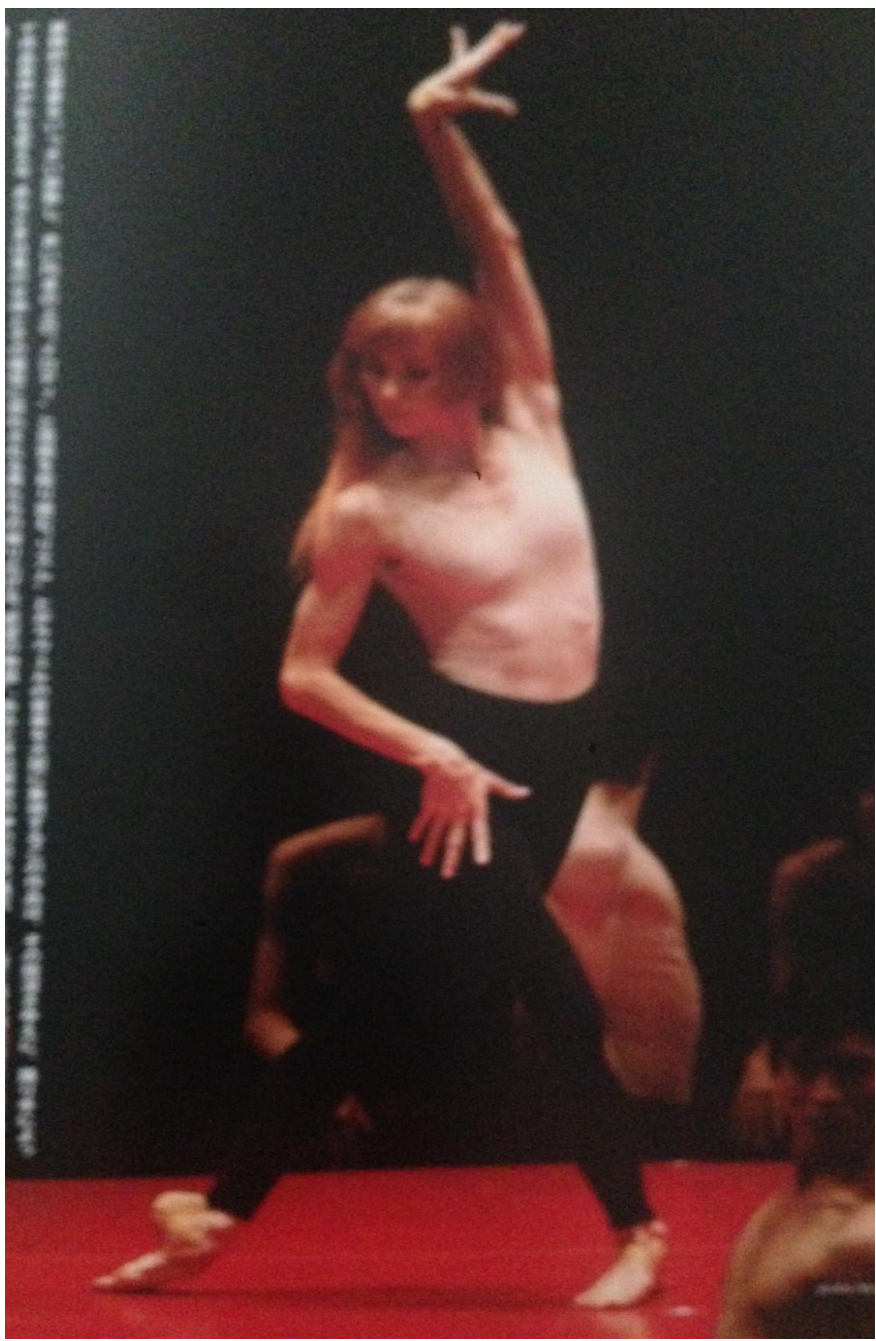
1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。

1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。1976年、初の海外公演を兼ねて17年ぶりに日本に帰国して10年振りに母国を再訪した。

Sylvie Guillem

シルヴィエ・ギユム

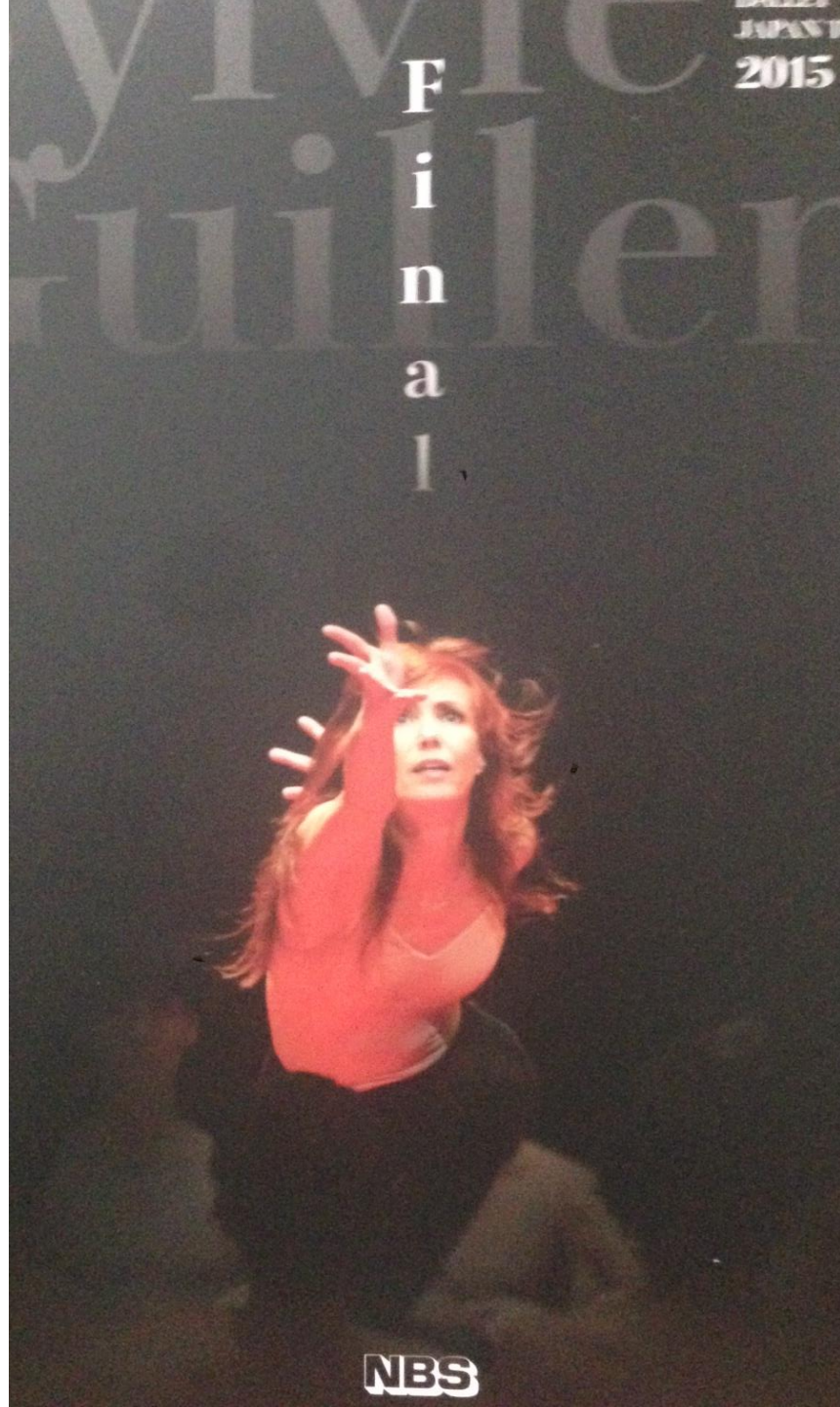




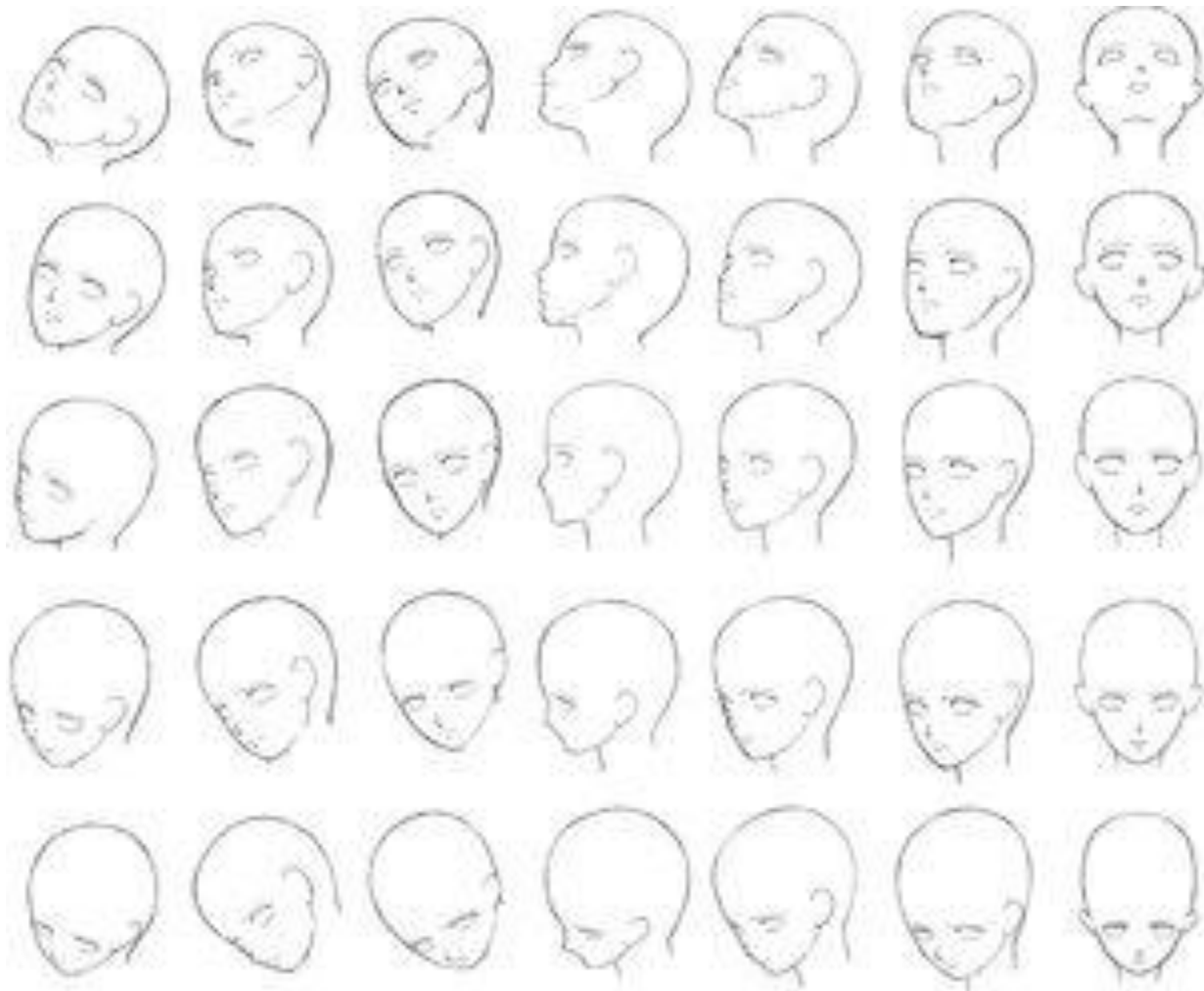


CART, (35-2) (www. 9-
N. 94-3-1) (35-2) SE
EXPERIMENTAL, (14)
FD-11 (1) (1) (1) (1) (1)
EXPERIMENTAL, (14)
EXPERIMENTAL, (14)
EXPERIMENTAL, (14)
EXPERIMENTAL, (14)
EXPERIMENTAL, (14)





人は様々...



人って美しい！

「機能医療」の条件

- 依頼関係であること（ラ・ポール）
- 通常の専門分野の医療行為を前提とする
- 「いい人」
- クライアント＝「病」としない
- クライアントの批判をしない
- 比喩表現を用いる（あいまいさ）
- クライアントの利益のみを追求
- 圧倒的な知識が必要（いきあたりばったり）
- コンテクスト情報と方針の提示（パニック）
- トラウマ療法をしない（「呪い」をかけない）
- 可能世界の存在を提示